

第二部 明星大学本『平家物語』絵本巻一の絵画部分について

山本陽子

一 明星大学所蔵本（巻二〜巻十一）との比較

新出の『平家物語』絵本巻一には挿絵が十七面、貼り込まれている。いずれも明星大学所蔵本（巻二〜巻十一）と同じく見開きの二頁を一図に用い、手描きの大和絵で金や上等な絵具により丁寧に彩色されている。人物は四頭身ほどと頭が大きく丸顔である。貴族や女房たちは繊細な筆でやや細めの上品な引目鉤鼻に表されるが、目には下瞼の線と瞳が入られ、目と眉の間には時に眼窩の線が薄く入り、頬などには淡橙色の隈がうっすらと刷かれる（図1）。庶民や鎧武者や僧兵ではやや鼻を大きく、口回りを薄墨でぼかして髭面にと描き分けをしているものの、「額打論」の場面の荒ぶる僧兵でも赤い小さな点のおちよぼ口に表され、忿怒は感じられない。このような顔立ちや、武者までも控え目に上品に描いてしまうことは、明星大学所蔵本の挿絵の人物表現とも一致する。それぞれの衣服の文様も時には金泥も交えて細かく書き込まれ、特に黒の束帯の上には膠の強い艶墨で地紋が重ね描かれている。鎧兜も丁寧に描かれているものの、公家装束の方に手慣れている感が強い。

背後の地の部分にはうっすらと金泥を刷き、土坡に緑青を施し、海は細い墨線をゆるく不規則に波打たせて重ね、上から群青の絵具を控えめに刷く。建物部分は定規を用いて界線をきっかりと描き、障子にはわずかに山水や草花を水墨や淡彩で描く。絵の上下に霞を柵引かせ、霞の輪

郭は細い墨線で描き、その内側には淡く青灰色を刷き、中心部には金砂子を密に蒔く。内裏等の描写は有職故実に照らし合わせた正確なものではなく、床全体に畳を敷き詰めた表現は、住吉派など近世初期の大和絵の「同時代の要素と復古的な要素が複合的に選択された」もの⁽³⁾となっている。彩色には緑青や群青のような高価な絵具が使われているが、べた塗りではなくあっさりとした刷かれ、鮮やかな朱色の他に、桃色やくすんだ水色も使用されているのが目につく。これらの特徴も明星大学所蔵本と共通し、本来は一具のものであるとする根拠の一つとなった。

挿絵本には最初の巻にのみ多く挿絵が入られる場合があるが、明星本の他の巻と比較すると、巻一の挿絵の一七図はむしろ少ない方で、巻二・三・四・七・十一は二一図、巻九に至っては三九図あり、巻一より少ないのは巻六の一五図のみであった。また巻一の「我身栄華」は華やかな見所として、例えば林原美術館蔵の『平家物語絵巻』（註4参照）などでは長大な画面に、他よりも細やかな彩色で平家一門と女性達が描かれているが、明星本巻一では他と同じく見開きの二頁で、男性の束帯も女房装束も詳細に文様は描かれるものの、他の場面と手の掛け方に差異は見出されない。明星本が十分な時間と金銭的余裕の下に注文を受けた作品で、全二百数十面の挿絵が、計画的に淡々と描かれたであろうことをうかがわせる。

ちなみに明星本本文の下絵は、淡い鳥の子色の紙に金泥のぼかしで幾筋も霞を柵引かせ、冒頭の頁には金泥で大降りの梅樹と松樹をからめ足

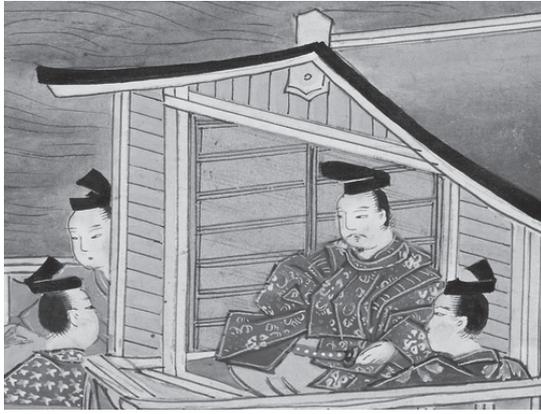


図1 明星本『平家物語』絵本「鱧」清盛部分

元に笹をあしらった図様を描き、次頁では遠山に藤と若松の景色を、次いで目録の一頁目に大振りの柳樹に椿樹を、次頁には一面に鉄線花の柵を表して物語の始まりを印象づけるが、以後の頁では霞の間にやや小さな遠山や草花などを金泥で配している。このような冒頭部分の描き分けと下絵の表現も、明星大学所蔵本巻二（巻十一）と共通する。

二 各場面の検討及び『平家物語』諸挿絵本との比較

新出の明星本巻一（以下、明星本と略称）の挿絵の主題は、「鱧」^{すずき}「我身栄華」⁴「二代后」⁵「額打論」⁶「清水炎上」⁷「殿下乗合」⁸「鵜川合戦」⁹「願立」¹⁰「内裏炎上」¹¹が各一面、「殿上闇討」¹²「祇王」¹³「鹿谷」¹⁴「御輿振」¹⁵に二場面が充てられている（章末の明暦版本・明星本挿絵比較一覧図版参照）。物語からどのような場面が選択されたかを、江戸時代前期とされる挿絵入り『平家物語』である林原美術館蔵の絵巻⁴（林原本）・明暦二年の版本⁵（明暦版本）・真田宝物館蔵の絵本⁶（真田本）、および新たに根津美術館蔵の扇面貼込の画帖⁷（根津本）を加えて比較したものが、文末に付し

た【『平家物語』絵本・絵巻の場面対照表】である。

この巻一部分において、明星本のみに取り上げられた箇所はなく、絵画化しやすい場面が順当に選ばれた印象を受ける。また明星本巻一の場面選択が特定の挿絵本と一致することはなく、選択に相互の直接的な影響がうかがわれないことも、二巻以下と同様である。

次いで各主題の構図と、どのような瞬間が絵画化されたかを、他本と共通して取り上げられた「殿上闇討」¹²「鱧」¹「我身栄華」⁴「祇王」¹³「二代后」⁵「額打論」⁶「殿下乗合」⁸「御輿振」¹⁵で、比較したい。

明星本「殿上闇討」の一場面目（図A）以下、章末の明暦版本・明星本挿絵比較一覧図版参照）は、抜身の刀を持って縁先に立つ平忠盛と、庭先に控えて誰何される忠盛の郎党を一図に描く。明暦版本（図a）と真田本は庭先の郎党のみで、抜身の刀所持は無い。林原本では一図に複数場面が描かれた中で、抜身の刀を持つ忠盛と庭先に控える郎党を同時に描くが、屋内に坐したままで、明星本とは異なる。明星本二場面目（図B）の忠盛が預けた竹の刀を前に鳥羽上皇に釈明する箇所は、林原本・真田本・根津本にあるが、御簾の奥の天皇を正面とする構図が共通するのは林原本のみで、その林原本では他者が刀を手にとって検める場面で、明星本と図様は一致しない。ちなみに林原本では忠盛のみ武者や郎党のような肌色に描かれるが、明星本では他の貴族と同じく忠盛の顔も白塗りに表されている。

「鱧」は熊野詣の清盛一行が船に飛び込んだ鱧を吉兆として料理する場面で、明星本（図C）は左上に緑青で山並が表され、左向きに一隻の屋形船の三分の二程が描かれ、清盛と俎上の鱧は向かい合うように配置される。真田本の一行は三隻の船、それ以外は一隻であるが根津本の船は右向き、林原本では清盛と俎^{まね}の位置が左右逆である。明暦版本（図

c) の山並と船の向きや清盛と俎の位置関係は明星本の構図と近いが、一行の人数や船尾まで描くか否かなどの細部は異なる。

「我身栄華」の明星本(図D)は、一段高い場所に僧形の清盛、その前に一門の男達が酒を酌み交し、壁を隔てた左に女達を描く。この場面はどの挿絵でも見せ場となっているが同一構図のものはなく、明暦版本(図d)では僧形の清盛の姿がなく、根津本では女達が一切描かれない。

「祇王」の明星本一場面目(図E)は、清盛と女が並ぶ前で舞う烏帽子姿の女で、祇王に取りなされて清盛の前で舞う仏御前の場面か、清盛の寵を受けた仏御前の前に呼び出された祇王の場面かの判断が難しい。

四場面に互って描く真田本で、舞う仏御前のみが烏帽子姿で描かれていることと、本文中で仏御前は「(鼓)打たせて一番舞たりけり」と書かれ、鼓を持つ男達が描かれることに対応する一方、祇王は泣く泣く「今様一つぞ歌うたる」とあるのみで舞う場面はないので、明星本の挿絵挿入場面は祇王の歌の後ではあるが、仏御前が舞う場面で清盛の隣が祇王と解すべきであろう。明星本の右の上座に清盛と祇王、中央に舞う仏御前、左に鼓の男達が描かれる構図は、林原本・明暦版本(図e)と近いが、林原本の仏御前は烏帽子を着けぬ後姿、明暦版本は仏御前の姿が明星本に近いものの舞う場所は座敷でなく屋外の板敷で、いずれも一致はしない。真田本は清盛達と仏御前の位置が違い、根津本の選択箇所は祇王が歌を書き残して清盛邸を出るところである。

明星本「祇王」の二場面目(図F)は、妓王親子の庵を仏御前が訪れる場面である。左の庵に仏を拝す尼姿の三人のうち右端の一人が振り返り、視線の先の門外に立つ仏御前を描く。この構図は明暦版本(図f)・真田本と共通する。ただし左端の尼が手に持つ仏具、門の屋根の有無、仏御前が笠を被るかや振り返る姿かなど、細部に相違が見られる。

根津本にこの場面はなく、林原本では三人が門で尼姿の仏御前を出迎える場面である。

「二代后」における挿絵の選択箇所は少しずつ異なり、明星本(図G)は二条天皇の迎えの牛車を左下に、故近衛天皇の后を父の右大臣が説得する箇所を描く。真田本もほぼ同様だが右大臣は立姿に表され、明暦版本(図g)は后が牛車へと立ち上がった時点、根津本は二条天皇と后が酒を前にした場面を描く。林原本では五場面に及び、后が艶書を受け取る場面、天皇の宣旨、大臣の説得、歌を書く后、車に乗り込む后、天皇との対面を描くが、いずれの図様も他本とは一致しない。

「額打論」で、二人の荒法師が延暦寺の額を壊す姿はどれも一致しないが、いずれも歌舞伎の見得のように定型化している。差異は群衆の数と配置とその反応にあり、真田本は上下に三十余名の僧侶の驚く姿を、林原本は四方に百五十人程の驚く僧侶達と、様々な姿勢の警護の武士二十四名を描き、根津本では右下に僧兵の一団のみを表す。明暦版本(図h)では四方の僧侶は十六人で、警護の四名の武士と左方の僧侶は逃げ腰であり、明星本(図H)は左右に九名の僧侶と三名の武士を描き、武士と左方の僧侶達は逃げ、右方の僧侶達は見守っている。

「殿下乗合」は、いずれも資盛が関白の部下に引き落とされる寸前の場面で、明星本(図J)は立ち並ぶ町屋の前で関白の牛車を右に、馬上の資盛を左に描く。明暦版本(図j)の構図も同様だが、背後は山と木立である。真田本は川と木立の前に擦れ違った関白の牛車を左に、馬上の資盛を右にする。林原本と根津本は右の資盛を駕籠の中に描き、左に関白の牛車、林原本の背景は土堀、根津本の背景はない。

明星本「御輿振」の二図目(図P)は、右に一基の神輿を捨てて逃げる九人の僧兵を、左に待賢門を背に矢をつがえる鎧姿の重盛勢を十人程

描く。明暦版本(図D)も構図はほぼ同じだが僧兵の数は多く、放たれた矢や矢に当たって倒れる僧兵も描く。真田本の構図は右手前に神輿と僧兵、左上に重盛軍を対峙させる。林原本と根津本は三基の神輿が描かれ、林原本は待賢門を右にして、未だ攻め寄せる神輿と捨て去られる神輿とを描き分ける。根津本では僧兵と神輿を中央に、右に明星本一図目にあたる頼政軍との対峙、左に待賢門内で待構える重盛軍を表す。各主題において、構図も絵画化された瞬間とも一致する作例はなく、相互の挿絵が直接的な模写関係にあると言い切れるものはない。

三 明星本と明暦版本に見られる近似する構図の作例について

ただし以上の図様の比較では、明星本と明暦版本において幾つかの構図が、同一ではないものの近似していることが注目される(明暦版本・明星本挿絵比較一覧図版参照)。該当するのはすでに挙げた「鱧」⁽¹²⁾「祇王」二場面、「殿下乗合」⁽¹³⁾「御輿振」の他、「鶴川合戦」「清水炎上」である。左右上下のような大まかな構図とどの瞬間を選ぶかの場面選択は共通するが、人数はいずれも明星本の方が少なく、個々の人物や背景などの細部は相違している。このことをどのように考えるべきであろうか。

例えば明星本の「祇王」二場面目で、門前の仏御前(図2)に対して庵内の三人の尼の一人が振り返る(図3)構図は明暦版本(図4)(図5)に近似しているが、この明暦版本の図様は真田本や、それ以外にもチェスタービーティーライブラリ本(CBL本)やプリンストン大学ゲスト東洋図書館本(ゲスト本)等の『平家物語』挿絵と共通していることが、出口久徳によって指摘されている。⁽¹⁰⁾出口はこれらの中で最も年代の古い明暦版本が他本の典拠とされたものと見て、それが「絵手本の

ような存在として流布していた可能性」を想定する。

ならば「祇王」ほか七件の近似した構図を持つ明星本も、明暦版本を典拠としたものであろうか。明らかに版本を典拠として作成された絵入り本の例としては、明星大学所蔵の絵本『徒然草』がある。⁽¹¹⁾この挿絵は一図を除いた全てが、『徒然草』の注釈書である版本『なぐさみ草』の挿絵から選ばれ、その構図に基づいて、登場人物を減らして白描に金泥で仕上げたものである。⁽¹²⁾しかし『徒然草』挿絵の版本挿絵への親近性と比較すると、明星本『平家物語』挿絵と明暦版本では、この場面に限っても、仏御前の笠の有無や振り返るか否か、三人の尼の位置や姿勢、手にする仏具など個々の細部には相違が見られ、親近性は薄い。

また滝澤貞夫は真田本において「祇王」など複数の構図が明暦版本と近似する現象について、挿絵への選択箇所が必ずしも同一でないこと、たとえ同じ箇所を選択した場合でも明暦版本と共通性のある構図は半分に過ぎないことを挙げて、真田本の絵と明暦版本との影響関係はな⁽¹³⁾いと見る。同様のことは、明星本と明暦版本についてもあてはまる。場面の選択箇所が一致しないこと、両者で同じ箇所が選ばれている場合も「殿上闊討」「我身栄華」「二代后」「額打論」「鹿谷」「内裏炎上」では違う場面や構図が選択されていることからすれば、明暦版本が明星本の直接の典拠であったと見ることは難しい。

それでは明暦版本と明星本の一部の構図が近似することは、どのように解釈すればよいのか。滝澤は明暦版本と真田本との近似について、『平家物語』の「同じ場面を描いている」ゆえと、「幾つかの『平家物語』挿絵」にも描かれ、構図がある程度定まっている場合が有った⁽¹⁴⁾ためと考える。そこで先行作品としてまず候補に挙げたいのが、宮廷絵師の土佐派による室町時代の白描「平家物語絵巻」の断簡である。静嘉堂美術



図3 明星本『平家物語』絵本「祇王」二場面目 三人の尼部分



図2 明星本『平家物語』絵本「祇王」二場面目 仏御前部分



図5 明暦版本『平家物語』巻一「祇王」二場面目 三人の尼部分 (国立国会図書館蔵)



図4 明暦版本『平家物語』巻一「祇王」二場面目 仏御前部分 (国立国会図書館蔵)

出口が別論文で挙げているように、合戦図の屏風(15)や絵馬、清水寺のような名所であれば名所絵の影響も視野に入れられよう。ことに「祇王」は独立した物語とされて、奈良絵本や謡曲にも取り上げられている。明暦版本と明星本の構図の近似を、共通する先行図様に求めるのであれば、絵巻や絵本以外にも、これらの多様な媒体による『平家物語』の作品群を対象としてゆかなければならない。明星本の挿絵の典拠は、そのように広大で多様な平家物語絵の分野において、あらためて検討すべきものであろう。

註 (1) 詳細な原色図版写真は、WEBサイト「絵本・絵巻の

館に所蔵される巻一の五場面(14)の挿絵には、明星本や明暦版本と共通する「鱸」の場面があるが、鱸が船に飛び込んだ瞬間を描き、船も二隻で構図は全く違う。また「二代の後」も、静嘉堂本は迎えの車に乗る場面の后を後ろ姿で表すもので、残念ながらいずれの挿絵とも一致しない。しかしこの時代までに『平家物語』は、絵巻や絵本以外の分野においても多く素材として取り上げられている。

- 世界「平家物語」http://ehon-emakimeisei-u.ac.jp/keike_top.htmlを参照された。
- (2) 山本陽子『平家物語』絵本・絵巻の挿絵について―明星大学図書館所蔵本を中心に―附 林原本・明暦版本・真田本・明星本場面対照表』『明星大学研究紀要』『日本文化学部・言語文化学科紀要』第一七号 二一〜三九頁 二〇〇九年、参照。
 - (3) 赤坂真理「江戸前期における寝殿造りへの憧憬と理解―住吉派物語絵にみる住宅観―」『講座源氏物語研究第十巻 源氏物語と美術の世界』二三四〜二六五頁 おうふう 二〇〇八年、参照。
 - (4) 小松茂美編『平家物語絵巻』巻第一 中央公論社 一九九〇年、参照。
 - (5) 国立国会図書館所蔵本(国立国会図書館デジタルコレクション)<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2367331>参照。参考図版も同サイトより。図は中央で山折りに表裏として綴じられているが、本来は一図のものとして扱った形に再現して扱う。
 - (6) カラー図版は小林一郎・小林玲子「絵で読む平家物語」第一回・第二回『長野』一九三・一九四号 参照。
 - (7) 根津美術館学芸部編『平家物語画帖』根津美術館 二〇一二年、参照。
 - (8) 国立国会図書館所蔵の明暦版本では「祇王」の二回目(又廿一)は本文と離れてかなり後の方に組み入れられているが、図様から判断した。
 - (9) 国立国会図書館所蔵の明暦版本で「殿下乗合」(又十八)は前方の別の文の箇所に組み入れられているが、ここでは図様によって判断した。
 - (10) 出口久徳「平家物語 解説」『チェスター・ビーター・ライブラリイ絵巻絵本解題目録 解説編』一五一〜一五二頁 勉誠出版 二〇〇二年・出口久徳「絵入り本『平家物語』の挿絵をめぐって―チェスタービーター蔵本を中心に―」『立教大学大学院日本文学論叢』一四六〜一五六頁 二〇〇一年、など。
 - (11) WEB サイト「絵本・絵巻の世界」『徒然草』http://ehon-emakimeisei-u.ac.jp/tsur-ezure_top.html 参照。
 - (12) 共同研究報告「明星大学蔵絵入り和本の基礎的研究とWEB公開、教育実践への応用」第二章 山本陽子「明星大学本『徒然草』の挿絵について」『明星大学研究紀要』『人文学部・日本文化学科』第十九号 一六九〜一七四頁 二〇一一年、参照。
 - (13) 滝澤貞夫「松代本『平家物語』考」『松代』一六〜二二頁 一九九七年、参照。
 - (14) 静嘉堂美術館編『室町の絵画展』図録九一〜九九頁 一九九六年、参照。
 - (15) 出口久徳「物語としての屏風絵―の谷合戦図屏風をめぐって―」『軍記と語り物』第三六号 六三〜七一頁 二〇〇〇年
 - (16) 出口久徳「寛文・延宝期の『平家物語』―延宝五年版『平家物語』と近世メディア―」『立教大学日本文学』第一一一号 八七〜九三頁 二〇一四年
 - (17) 京都大学附属図書館所蔵 奈良絵本コレクション「妓王」(一般貴重書・86849・

明曆版本・明星本挿絵比較一覽図版

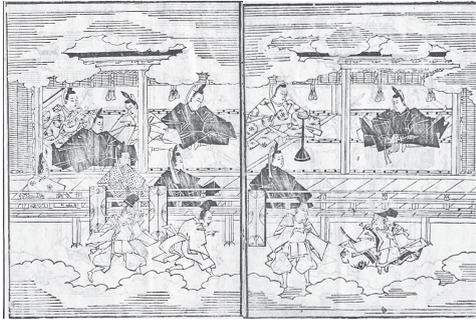


図 a 明曆版本卷一「殿上闊討」



図 A 明星本卷一「殿上闊討」(1)

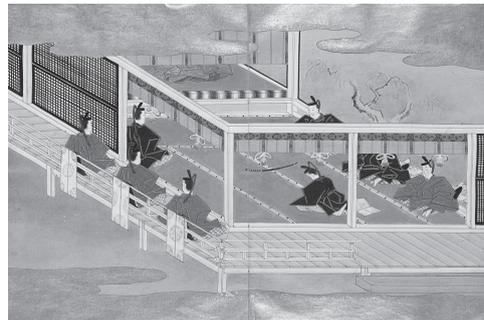


図 B 明星本卷一「殿上闊討」(2)

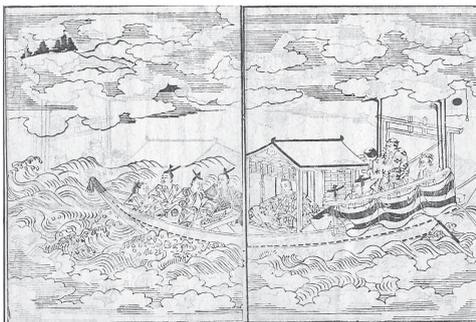


図 c 明曆版本卷一「鱧」



図 C 明星本卷一「鱧」

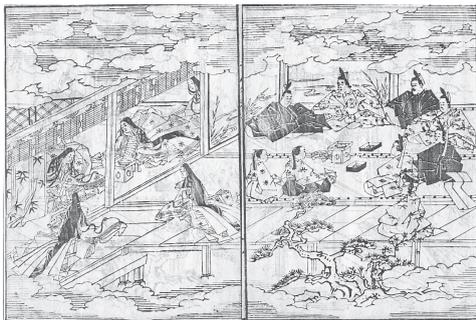


図 d 明曆版本卷一「我身栄華」

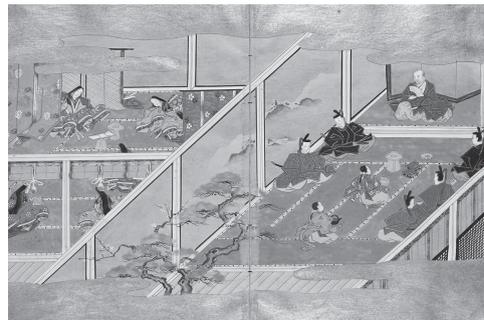


図 D 明星本卷一「我身栄華」

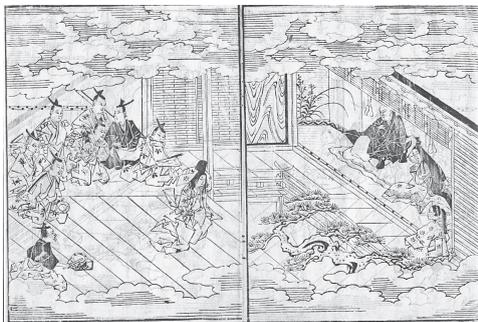


図 e 明暦版本巻一「祇王」(1)

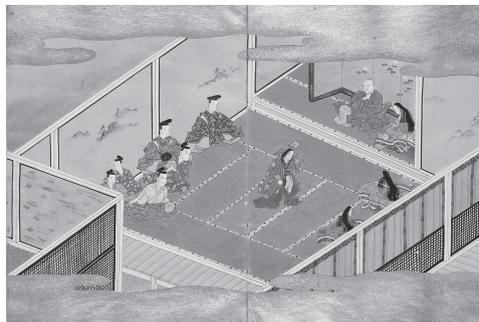


図 E 明星本巻一「祇王」(1)

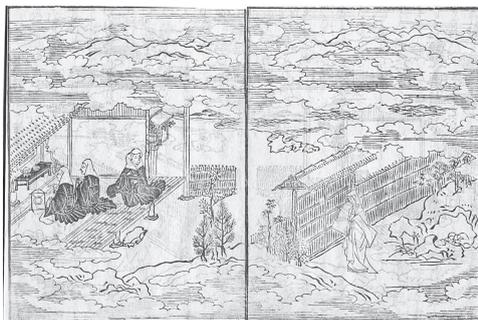


図 f 明暦版本巻一「祇王」(2)

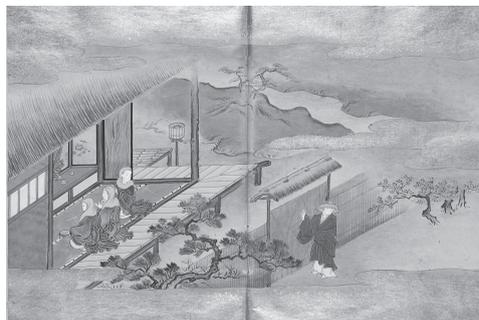


図 F 明星本巻一「祇王」(2)

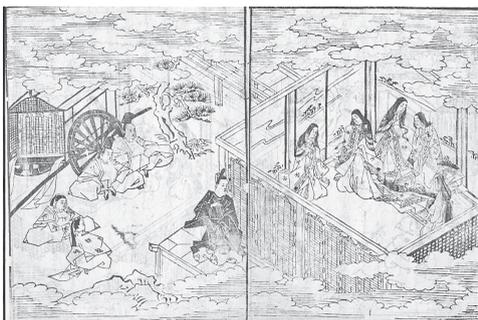


図 g 明暦版本巻一「二代后」

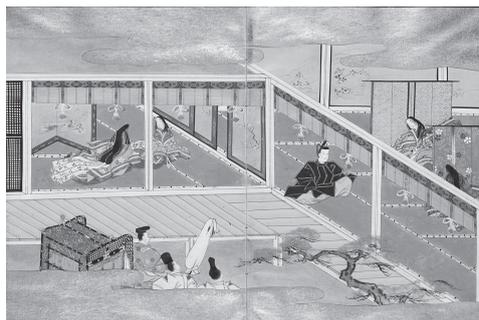


図 G 明星本巻一「二代后」

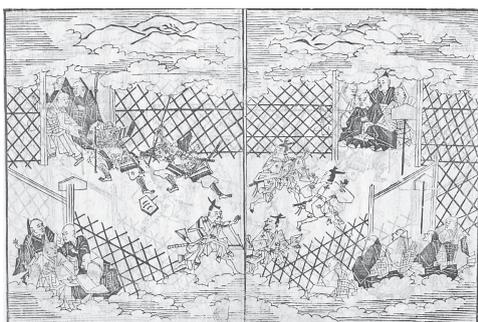


図 h 明暦版本巻一「額打論」

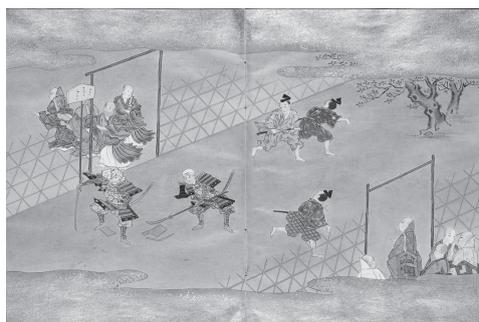
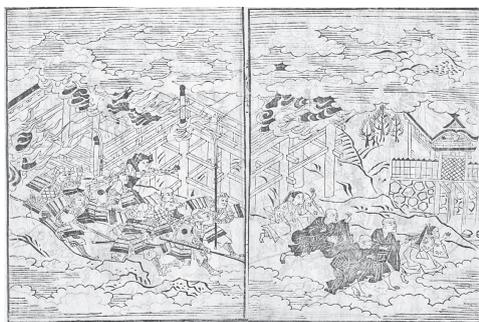
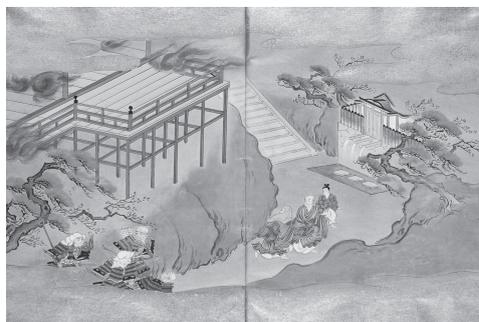


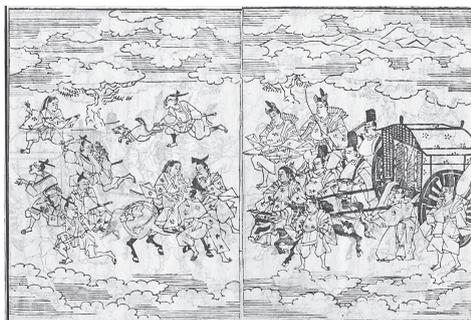
図 H 明星本巻一「額打論」



図i 明暦版本巻一「清水炎上」



図I 明星本巻一「清水炎上」



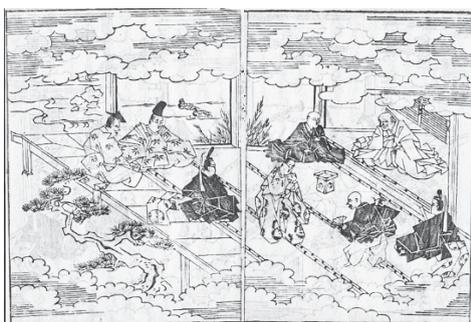
図j 明暦版本巻一「殿下乗合」



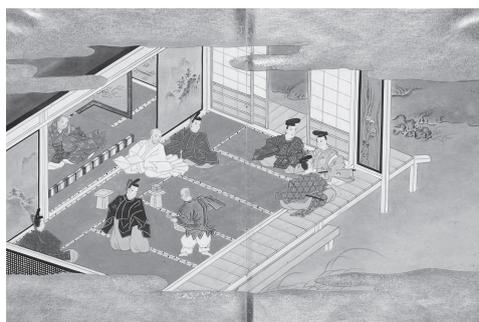
図J 明星本巻一「殿下乗合」



図K 明星本巻一「鹿谷」(1)



図I 明暦版本巻一「鹿谷」



図L 明星本巻一「鹿谷」(2)

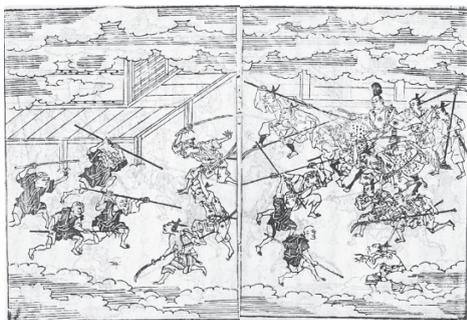


図 m 明暦版本巻一「鶴川合戦」



図 M 明星本巻一「鶴川合戦」

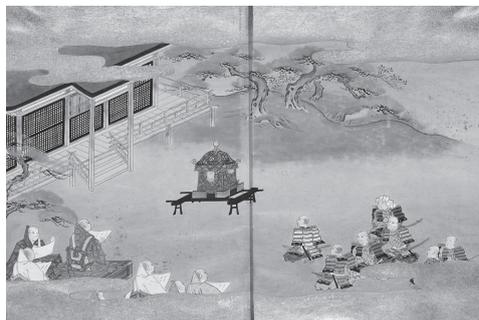


図 N 明星本巻一「願立」

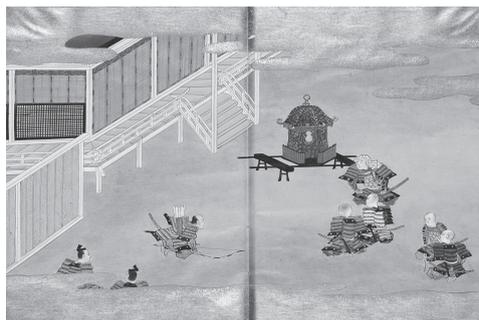


図 O 明星本巻一「御輿振」(1)

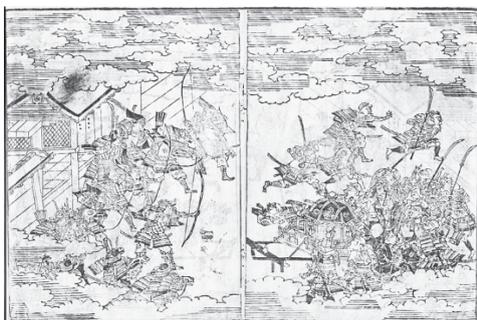


図 p 明暦版本巻一「御輿振」

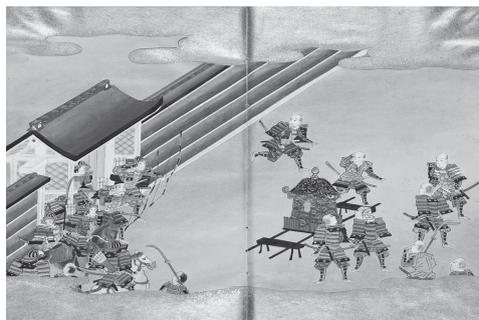


図 P 明星本巻一「御輿振」(2)



図 q 明曆版本卷一「内裏炎上」



図 Q 明星本卷一「内裏炎上」